

## 第2回アジア気象会議（ACM：Asian Conference on Meteorology）の報告

2017年10月23日～24日の日程で、標記会議が韓国釜山国際展示場（BEXCO）において開催された。2005年以降、日本・中国・韓国の持ち回りで3か国合同気象学会が実施されてきたが、より長期的視野でアジアの気象学研究の連携強化を目指し ACM と改称されたのが2015年である。初回は京都大学で開催され、今回は2回目にあたる。主催した韓国気象学会の尽力により、前回の192件を大きく上回る269件の講演申し込みがあり、会議は終始盛況であった。同じ会場で引き続き韓国気象学会が開かれたこともあり、韓国の学生が多く参加したことが最大の要因で、参加者の内訳は韓国142名、中国82名、日本30名、米国6名、インド5名、以下英国、インドネシア、カナダ、フランスから各1名であった。会議のプログラムは <http://www.komes.or.kr/acm2017/> から閲覧できる。前回、会議終了後に SOLA の特集号が編集されたことになり、韓国気象学会のレター誌 Asia-Pacific Journal of Atmospheric Sciences で特集号が企画されている。

会議は、23日午前のプレナリーセッションから始まり、それに先立って日本気象学会理事長の岩崎俊樹教授、中国気象学会副会長の Yongyun Hu 教授、韓国気象学会会長の Byung-Ju Sohn 教授の挨拶があった（第1図）。プレナリーセッションは各学会1名の招待講演で構成され、日本気象学会からは余田成男教授が成層圏-対流圏結合や関連する大気科学研究の最新の状況について講演を行い、大変好評であった。中国と韓国からは、南京科学技術大学（NUIST）の Liao Hong 教授と延世大学（Yonsei University）の Ying



第1図 初日午前のプレナリーセッションの様子。

Noh 教授がそれぞれ講演を行った。世界気候研究計画の合同科学委員も務める Hong 教授は、北京の煙霧（haze）の長期変化に関する最新の興味深い研究成果を紹介し、乱流混合スキームの開発で有名な Noh 教授は、新しいラグランジュ雲モデルとその応用について熱のこもった講演を行った。第2図は、プレナリーセッション後にこれらの講演者を含むシニア研究者らを中心として撮影された記念集合写真である。

ACM では、セッション数を3つほどに絞り専門性を高めることにより、議論を活発化する方針をとっている。今回も、以下の3つのセッションが並行して開催された。ただし、セッション1と2の申込件数が多かったこともあり、会場を4つに増やしてそれらの合同セッションを設けた。

- ・セッション1：Climate System Interactions (Atmosphere-Ocean-Land-Cryosphere Interactions)
- ・セッション2：Improving Observation and Prediction of Weather and Climate Extremes
- ・セッション3：Regional Air Pollution and Environmental Changes

各セッションは、3学会から1名ずつコンピーナが出てプログラム編成を行った。日本気象学会からは、セッション1. 小坂 優（東京大学）、2. 高藪 出（気象研究所）、3. 竹村俊彦（九州大学）の各氏がコンピーナを務めた。この場を借りてお礼申し上げる。

セッションの口頭発表は数を絞り、その分議論の時間を確保していたのがよかった。それだけに、個々の口頭発表はレベルの高いものが多かったように思う。広い通路に設置されたポスターセッションでは115件の発表があり、学生の発表が多くを占めた。当然であるが、シニア研究者らは、他国の若手研究者のポスター発表を熱心に聞いてコメントなどをしていた。国際学会での発表経験の少ない学生にとって、ACM はさほど緊張せずに発表できるよい機会であっただろう。口頭、ポスター発表ともに感じたことであるが、若手研究者の研究レベルが明らかに向上している。この傾向は中国から参加した学生の発表に顕著で、背景には論文出版数の増加だけでなく、海外経験の豊富な若手教員の増加や研究予算の問題などさまざまな要因



第2図 会議集合写真。人数が多すぎたため、学生は入らずシニア研究者のみで撮影された。

が関係していると推測された。

会議前日に国際組織委員会 (IOC) が開かれ、3学会の代表者が集まって ACM の今後について協議した。ACM に改称してからの方針は各学会で好意的に捉えられており、今後もこれを継続しつつ、アジアや欧米などからの参加を促進することを確認した。第3

回の ACM は2019年秋に中国で開催することが了承されている。魅力的な開催都市を検討し、開催時期も国内秋季大会とできるだけ離して、日本からの参加が容易になるように調整する予定である。今回、実は日本からの参加が30名と3学会中最小で、大変残念に感じた。次回は多くの学生や若手研究者にぜひ積極的に参

加してもらいたい。学会理事会、国際学術交流委員会としても、さらに広報に努めるとともに ACM 出席補助金の充実を図るなど、我が国からの参加者増加に向けて努力していく所存である。

(理事長：岩崎俊樹)

(国際学術交流委員会：渡部雅浩・余田成男)